



気がした。しかもその感覚は初めてではない。
気のせいだと思った。自分のように空気みた
いな存在に時間を割く人はいない。突然、長
くて細い手が肩に置かれ、セレナは、ぎょっ
として振り向いた。

「あなたは誰？」

セレナは怯えながら言った。

「だれでもいいでしょ。エンジェルと呼んで。
一緒に話そう」

謎の女性は柔らかい口調で言った。セレナは
驚き、目は恐怖に満ちた。そして時間は凍り
付いた。

「分かりました。でも、私はつまらない人間で